

モノを活かす 人が動く ところをつなぐ

先が見えない時代のまちづくり

先崎 千尋 (茨城大学地域総合研究所客員研究員)

1. はじめに—「新しき村」との関わりを含めて歴史と伝統があり、豊かな自然が広がる都農町へお招きいただきありがとうございます。これからつたない話をさせていただきます。

都農に参りますのは今回で3回になります。5年前に隣の日向市で地域農業活性化講演会に招かれ、「地域循環型農業を日向市でどう創るか」というテーマで話をさせていただきました。その時に伺いました。その前には、木城町にある「新しき村」創立80周年の行事が1998年11月14日と記憶していますが、その折に都農や東郷町、南郷村などこの周辺をあちこちご案内いただいております。「新しき村」をご存知の方は多いと思いますが、1918年（大正7年）、白樺派の作家・武者小路実篤が私財と賛同者の寄付で木城町石河内に4haの土地を購入し、共に働き、余暇は個性を活かして人間らしく生きる社会を創ろう、としました。

私の母方の伯父が戦前、水戸にあった橘孝三郎の愛郷塾に関わり、伯父が強く影響を受けていた隣町出身の弓野征矢太（きゅうのそやた）という人が実篤と一緒に「新しき村」を開いた、と聞かされておりました。伯父は、埼玉県毛呂山町にある「東の村」には何度か行ったことがあるようでしたが、日向の「新しき村」には来ていませんでした。「新しき村」が現存することを知ったのは、こちらへ最初に来た少し前のことでした。そういうこともあって、私は自分の目でどういうところなのかを確かめたかったのです。私が「新しき村」を訪れたその日がちょうど、実篤が石河内に土地を決めて80年の記念すべき日だったのです。偶然ではありますが、必然なのかな、とその時に思いました。

私の姓の「まさき」という名前はきわめて珍しく、住んでいる所は茨城県水戸市から北へ約16kmほどにありますが、そこにしかない姓だと思っていました。同じ字で「せんざき」と読ませる人は福島県などにあります。ところが、鹿児島県にやはり、「まさき」という姓があるのが最近わかりました。陸上自衛隊の制服組ではトップである統合幕僚本部議長の先崎一さんという方で、私の親父と同じ名前なんですね。そのことを新聞で知った時は信じられないくらいでしたが、地名・氏名というのは全国各地さまざま、実にいろいろあるものだと思います。

冒頭の紹介にもありましたように、私は昨日までタイに行っていました。帰途、宮崎空港の南のあたりを通過しましたが、出来ればこのあたりで不時着してくれればもっと早く来られたのではないかな、などと思いながら改めて今日、茨城からやってまいりました。

今日は、この河野町長から、ぜひ話をしてほしいということでしたので、やりくりして参りました。それはやはり、都農はもう一回来たい町、何回でも来たい町、そういう思いが私にあったからです。

今日は「モノを活かす・人が動く・ところをつなぐ」というテーマで話をさせていただきますが、前にお送り頂いた町勢要覧をあらためて拝見いたしました。タイトルが「奏でるまち」。表紙をめくると、環境保全型農業と沖縄県糸満市との交流を特集しています。そして、有機農業・循環型の社会構築への着実な歩み、自分を伸ばす、自ら楽しむ、多様なイベントを通して見えてくる新しい時代の商工業、山が近海の漁場を育んだ、と続き

ます。さらに、ワイン物語、町の歴史があり、教育、福祉、環境・防災などの現在が語られ、「21世紀に光り輝く都農町」で明日を展望しています。田園交響都市という表現もいいですね。都農町出身のツイッター奏者河野保人さんは町勢要覧の表紙裏に「日向灘！尾鈴山！詩情豊かな自然に恵まれた都農で培われた音楽美に対する感性は私にとって大きな原動力となり、故郷への想いは胸深く世界へと躍進」と故郷への熱い想いを語っています。ワインについてもいろいろ紹介されています。工場長の小畑さん、ぶどう生産者の黒木さん、料理長の横山さんの鼎談から、それぞれのワインにかける想いと「メジャーになりつつある」都農ワインの夢が読み取れます。前に伺った時には、並ばないと買えないと町の人から聞きましたが、現在では20万本も製造されていると先ほど伺いました。しかも原料になるぶどうはすべて町内で生産されているようで、びっくりしています。そのようなすばらしい町に来て、それらを実践している皆様の前で話すことはあまりないのではないかといい気もしていますが、まちづくりを進めていく上で、町民、行政、団体などがどういう役割を担っていったらいいのか、よそからの目で語るのもいいことではないか、ということであえて引き受けただけでございます。

以上が前置きです。本論に入る前に、今日の内容を整理してお話ししておきます。最初に「いま、日本は」、というタイトルで、私どもの現在の状況がどうなっているのか、を総論として話をさせていただきます。次に、私がこれまでにいろいろ経験、実践してきた中から、私の町・瓜連町と私が現在も関わりを持っている東海村の事例を中心に、こんなことを考え、こんなことをやってきたという話をさせていただきます。最後に、都農ではどうすればいいのか、という大きく3つの区分けをし、私の考えをお伝えしていきたいと考えています。

2. いま、日本は 弱肉強食の時代

こちらへ来る前に行っていたタイでも日本の新聞は読めるし、日本のテレビも見ることができるのですが、その中で静岡県の女子高校生が、自分の母親を、劇物を使って殺そうとしたというニュースを見ました。この事件だけでなく、この頃は親が自分の子どもを殺したり、逆に子どもが自分の親や祖父母を殺したりというような、まったく信じられない事件が多く発生しており、殺伐とした日本なのだと思いつつ、ニュースを見ていました。そして、どうしてこんな日本になってしまったのか、という思いをずっと抱いております。

また我が国では、自殺者が年間3万人を超していると伝えられています。1日100人近くです。交通事故で亡くなる人よりはるかに多いのです。自分の命を断つということはよくよくのことであり、それぞれ事情はあるのですが、住みにくい世の中なのだ、という感じがいたします。

その反対に、昨日までいたタイのバンコクではすさまじいエネルギーを感じました。路上に屋台がたくさん出ていて、そこで朝飯、昼飯、晩飯を食べたり飲んだりしていますし、町中はものすごい車の渋滞です。ある意味ではこの国にはすごいエネルギーがあるなと感じました。それに比べて、宮崎から都農に来る途中の町並みはひっそりと活気がない。それは宮崎だけの話ではないのですが、やはり日本全体に元気がない、活気がない、そう思います。

元気がない、活気がないのに、刹那的にいろいろなことを起こすということから、この日本どこへ行く、という気がするのです。

レジュメには「弱肉強食の時代」と書きましたが、若者にはフリーター（15歳から34歳までの非正社員の就労者、2001年の内閣府推計では417万人）、ニート（15歳から34歳のうち教育にも雇用にも職業訓練にも身を置いていない若者のこと。2002年の内閣府の調査では85万人）が増えており、学校を出てもなかなか職にあり就けない状況にあります。年収300万円未満の世帯が日本人の3割

という厚生労働省の調査結果もあります²⁾。

さらに、ご存知だと思いますが、高齢化が進む一方で、出生率（正確には合計特殊出生率）が2004年は1.29人と伝えられています。男女2人で2人の子を生まない、ということが続けば、あと何百年かでゼロになる可能性もあるわけです。活力を欠く高負担高依存型社会の到来が予見されます。子どもを作らない、産まない。自殺者も増えている。そして元気がない。ということは、若い人たちは未来がはっきり描けない。状況は悪くなるばかり。そういう時代なのかという気がしております。もう40年も前のことになりますが、私の学生時代はこんなことではありませんでした。「世界はふたりのために」という歌が流行っていて、日本経済がちょうど高度成長期に入っていく頃でした。

未来が描けないのは若者だけではありません。中年の人たちはリストラされるか、失業の危険にさらされています。一流企業だと思って入っても駄目ですね。倒産だという日がある日突然自分に來ることもあるのです。会社が残っても、残業はなくなるし、給料もダウンです。仕事もどんどんきつくなります。私の住んでいる町に30年近く前に出来た住宅団地では、ローンが払えなくなって、出ていった人が増えている、と聞いています。

私は今農協で仕事をしています。私どもの地域は干し芋が特産品で、全国の8割のシェアをもっています。農協では農家から集めた干し芋を選別し、小袋に詰めて出荷しますが、その作業は8月前から始まります。パートの人たちの時給は750円ですが、募集すると応募する人の数がすごいのです。必要なのは主に女性なのですが、男子も干し芋の出し入れ、箱詰めなどで少しは採用します。そうすると、40歳代から50代の応募者が何人かはいるので。私は、そういう人ははじめから断ります。というのは時給750円で1ヶ月働いても10万円ちょっとにしかなりません。干し芋のバック作業は単純労働ですので、それで生活できるほどは支払えないのです。仕事は組んでやっていて、途中で辞められたら困るので、どこか他を探して

ください、と最初にお断りします。まるで人生相談をやっているような気分になります。気の毒だとは思いますが、そういう人をすべて雇う訳にはいきません。倒産や工場閉鎖などで、会社がなくなったり、失業する人がたくさんいたりする、ということを目の当たり見ているのです。

またお年寄りの方々も年金が減られ、来年度以降医療費の自己負担割合が増やされる見通しです。以前は、70歳以上の老人医療費はただでしたが、これからはそうはいかなくなります。私も年金世代に入りつつありますので、他人事ではありません。

私の農協では、事業の一つとして組合員及び地域の人たちに貢献しようと、デイサービスセンターを運営していますが、10月から介護保険法が改正され、食事代の助成がなくなり、本人からいただくかなければならなくなる、ということになりました。今まで食材料費の本人負担は1日500円だったのですが、廃止になる国からの補助分だった全額はいただけない、ということで理事会に諮り、200円上げて700円にしました。

いくつか身近な例をあげましたが、この日本という国は、若者から年寄りまで住みにくくなったというか、表面上は豊かに見えても、全体として息苦しい、せちがらい世の中になってきています。三浦展氏の『下流社会』（光文社新書）という本がベストセラーになっているそうですが、それも世相を反映しているのだと思います。

まちでは

私が仕事をしているひたちなか農協は、本店は水戸市の北になる旧勝田市にあります。日立製作所の工場がいくつもあるところで、かつては企業城下町でした。また自衛隊の施設もあります。駅の近くは繁華街で、かなりにぎわっていました。少し裏へ入れば飲み屋もずらりとあります。しかし今は表通りのアーケード街はシャッター銀座という言葉がぴったり当てはまる状態になってしまっています。シャッター銀座の出現というのは、勝田駅前だけでなく、全国的な傾向のようです。

町中から八百屋、魚屋がなくなり、米屋、豆腐

屋も消え、雑貨店、洋品店、薬屋もなくなった。昔は集落(大字)毎に何でも揃う店がありました。今私が住んでいる地域ではそういう店はほとんどなくなってしまいました。私の住んでいる瓜連地区には、JR水郡線というローカル線があるのですが、以前はその駅前に行けば大体の用は足せました。簡単な飲み食いもできました。今ではそれが全部なくなってしまって、車を運転できない人はそれこそ豆腐も食べられない、とぼやいています。一方で、郊外にはアメリカ型の巨大な店舗やドラッグストア、安売りの酒屋などが次々に誕生し、それに合わせるように、古い形の店は商売を止めていきます。また、農協の管内を歩いていると、コンビニがそれこそ信号のある所などに1年のうち何か所もオープンしています。

私の町には世帯数800余の新しい団地もあるのですが、その中におった店舗はずっと前に撤退してしまいました。誰でも10年経てば10歳年を取りますから、年々若い人は減っていきます。地域社会、そしてこの日本という国は本当にどうなってしまうのか、という気がしています。

また、これも全国的な傾向ですが、回りにあった中小企業がどんどん海外に工場を移したりして、国内の工場は閉鎖してしまっています。そこで働いていた従業員は大変ですね。

私たちが日常使うものはほとんど海外製になってしまいました。農家で使う地下足袋も国産ではなくなくなっています。毎日使うタオルもそうですね。100円ショップにあるものがすべて海外で生産されたものではないようですが、あの店へ行くと、あっ、こんなに安い、と驚くことがいっぱいあります。

我が国のものづくり産業全体に活気がないというのは、国内で生産するよりも海外の方が安く作れるから、そちらへシフトしていくという大きな流れ、うねりに原因があるのではないのでしょうか。製造業全体、つまり第二次産業が大手企業であれ中小企業であれ、国内で生産しないでもいい、という状況です。国内でモノを作らなくなったのだから、仕事がない、つまり就職できない、リストラ

される。考えてみれば、当たり前のことです。

都農へ来る途中、この町で大きな店はありますが、と聞きましたら、農協のAコープともう1軒あるのだそうですが、私どもの隣町にはジャスコがあり、私の家から車で5分で行けます。そこまで行く途中、信号はありません。また私の農協管内には、郊外に映画館まで入っている巨大な複合型の量販店があります。郊外型、そのような店舗が拠点としていくつか出来ていて、地元の店は全部つぶれさせています。製造業も流通業も大手が支配、そしてコンビニが増えている。そのコンビニですら淘汰されてきています。

コンビニ、大型スーパー、100円ショップ、そういう量販店、安売り店が幅を利かせて、農村部までどんどん進出している状況です。

農村では

私どものところには、近くを走る常磐線沿線に日立製作所の工場がそれぞれ各駅にずらりとあります。以前は兼業農家の人が弁当を持ってそれらの工場のどこかに通っていました。30分から1時間でどこにでも勤められました。そのようなこともあってか、農業は高齢化が進み、田んぼの管理なら土日百姓で間に合いました。最近次第にそれもやめてきています。だから耕作放棄地がすごく増えています。

農協の管内には原子力で有名な東海村がありますが、さつまいもの産地で、昔はさつまいものあとには麦を作っていました。ところがご承知のように麦は儲かりませんから、作っても赤字ですから、農家は作付けしない。従って、さつまいもを作った後はそのまま放置し、荒れてしまいます。関東平野は風が強いところですから、3月から4月に軽くなった土が砂ほこりとなり、舞い上がります。北京の黄砂と同じ、あるいはもっとひどいぐらいの状況です。目もあけられない。車も運転出来なくなり、一瞬止まることもあるほどです。畑が荒廃していることを示しています。私どもの農協管内に20代30代で農業に従事している人がどのくらいいるかという、数えるくらいしかいません。タイの農村部でも同じようだと言

てきました。農業を嫌う、農業に従事しないというのは世界共通のこのようであります。

スーパーの野菜・果実売り場には輸入農産物が氾濫しております。我が国の農産物の自給率は40%と言われていますが、現実にはそんなにあるという感じがしません。例えばそば屋でそばを食べるとすると、そば粉は外国産が90%くらい、つなぎに使う小麦粉もオーストラリア産。天ぷらのエビも衣も割り箸も海外のものです。日本のものは水くらいです。パンもうどんもそうです。チェーンのレストランで出てくる野菜はほとんど外国のものだと思います。そのような野菜は、野菜臭さがありません。野菜独特の香りがありません。40%の自給率とはどうなのでしょう。実感としてはもっともっと少ないという気がします。肝心の農家の農産物自給率は10%ちょっとです。果物も野菜も同じように、外国に占領されている、そのような気がします。輸入が止まったらどうなるのか、考えただけでも恐ろしくなります。ウナギのかばやきや焼き鳥に必要な備長炭も、中国政府は輸出をストップするとかで、業界は大慌てのようです。このほかアメリカ産の牛肉が12月ごろに入りそうだと伝えられていますが、とにかくアメリカからの輸入が1年数ヶ月ストップしました。そのことで牛丼の吉野屋が赤字になったそうですね。皆がどうしてあんなに安い牛丼が食べたいのか、試しに東京で一度食べてみたことがあります。一杯が290円でした。店に入って注文して、食べて代金を払って出るまでに5分ほどです。ご飯はまずい、肉は味が付いているからなんとか食べられる。要するに、牛丼なるものを5分で食べるのではなく、口に流し込んで、お金を払って出てくるのです。アメリカ産の牛肉が入らなくなった時、マスコミは「牛丼文化が消える」などと騒いでいましたが、これがたべものなのか、文化とはこんなものではないのだ、と私は思いました。私は、コンビニの食や安い牛丼はたべものではない、エサだと思ひ、そう主張してきています。290円で国産のものを提供できるはずがありません。食文化もそ

うですが、伝統的にその地域で長いこと伝えられてきたのが文化というものです。文化とは簡単によそへ動かせないものです。牛丼は文明であるかもしれないが、文化ではない。体に入ってエネルギーにはなるかもしれないが、エサでしかないと考えています。人間も動物並になりました。

農村の状況を整理すると、高齢化、耕作放棄地の増大、自給率の低下イコール輸入農産物の氾濫、というキーワードでまとめられます。

「平成の大合併」
「平成の大合併」という名のもとに、全国津々浦々で合併が進んでいます。私どもの町もそのひとつで、この1月21日に隣の那珂町と合併して那珂市になりました（吸収合併）。合併前には住民に、合併しないと町はやっていけなくなる、合併すればこんなに良くなると、好いことづくめの説明がなされました。しかし合併してみると、住民へのサービスは確実に低下しています。切り捨てです。良くなったのは議員の報酬だけだ、と私は悪口を言っています。これまで町の公民館を利用する時は、原則はタダでした。グラウンドも同じです。合併してからはみんな利用料を取られます。子供会が球技大会をやるにも、老人会が集まりをやるにも、ゲートボールをやるにもみな規定の利用料を払うようになったのです。子供会や老人会など施設をよく利用する人たちは不平不満の声をあげていますが、どうにもならないようです。私は、公民館などの建物もグラウンドも利用しなければ何にもならないと思います。生涯学習にも社会教育にも役に立たないような施設があっても無駄ではないか、ということです。金を取ることによって結果として住民の利用をシャットアウトする。規則はこうですからと。

税金も高くなりました。また、瓜連町では学校給食の中味の充実を図ろうと、1人につき月100円ずつ助成していたのですが、それも止め、新入生へのランドセルの無料配布もなくなりました。広域で運営している老人入浴施設の利用も補助することを止めました。区長手当も減ったとか。このような例を数え上げればきりがありません。

でも、これらのことは考えてみれば分かりきったことです。このために合併するのですから。合併は住民のために行うものではなく、一種のリストラです。企業でも大変な思いでやっていうことを行政レベルでやる、というのが合併なのです。

先ほど触れた東海村は合併しません。原子力企業からの税金が入ってきますから、合併する必要がないのです。むしろ合併すると、財源を他へ持っていかれてしまいます。財政の豊さと原子力事故の危険とは隣り合わせ、コインの裏表のようなものではあります。この間のJCOの事故が発生した時は、瓜連町は10kmの危険区域内でしたが、行政区域が違うので、行政も個人も恩恵は何も受けていません。逆に大きな事故が起きれば、日常そのエリア内で活動している私の命はまずないもの、と考えています。

茨城県には国からの地方交付税をもらっていないところが3カ所あります。東海村の他、鹿島開発で工場などが林立している神栖町（波崎町を吸収し、現在は神栖市）、競馬のトレセンのある美浦村です。美浦村も合併の話に住民投票でストップさせました。東海も美浦も村のままでいいということなのです。

水戸黄門が晩年隠居していた常陸太田市は、合併前は2万8千ほどの人口でしたが、常陸太田市の予算よりも東海村の方がはるかに多かったのです。東海では村道でもメインの通りには歩道が付いています。学校も立派です。消防もごみ処理も病院も自前で運営しています。だから議会も村民も合併しようとしません。

合併は、職員を減らす、住民へのサービスを減らすということがねらいですが、合併すると合併特例債が国から出て、ハコモノ行政がまた復活します。何かを建てれば、その維持費がかかり、大変になるのですが、国は建物や道路というあめ玉を与えて、合併しないと地方交付税を減らすよ、と締め付けをしています。

小泉構造改革の目指すもの

日本がおかしくなってきた原因にはいろいろ挙げられますが、たまたま大学で同級だった小泉純

一郎首相の構造改革にあるのだ、と考えています。こんなに世の中を悪くしているというのに、相変わらず人気が高いのが不思議です。

今、マスコミでは楽天、村上ファンド、ライブドアの堀江社長などの動きが取りざたされていますが、彼らが狙っているのは、なんだかんだ理屈を言っても、結局お金でしかないわけです。ホリエモンはニッポン放送の経営権をめぐるフジテレビと争い、何百億円か儲けたわけですし、プロ野球のしにせ・阪神やマスコミの雄と言われてきたTBSテレビも現在、村上ファンドや楽天の標的にされています。それらのいずれもが徹底した市場原理主義の考えによって動いています。

経済・地域社会を蝕む市場原理主義

100円ショップやユニクロに象徴されるように、安ければ安いほどいい、と消費者も考えるようになってきた。私は近所でよく言うのですが、「この店が安い」、「スーパーへ夜8時過ぎに行けば、惣菜や刺身などが安くなる」、「コンビニは24時間開いている」などと言うけれど、国内でモノ作りをしなくなれば、職場もなくなるわけで、結局自分や次の世代の人たちの首を絞めていることになるのだ、と。吉野屋やコンビニは現場には正規の社員はいりません。巨大なスーパーが近くに出来れば、自営でやってきた店は成り立たず、廃業しなければなりません。私は、目に余る市場原理主義、拝金主義の横行が日本経済、地域社会を蝕んでいる、と考えています。

私の地域では、干しいもの生産量が年間で7千トンです。それとほぼ同じ量が中国から入ってきています。単価がまるで違います。中国で生産されるようになったのは、ひたちなか市内の業者が技術を中国へ持って行ったことが始まりのようです。最初の頃は中国で出来た干しいものを国産と混ぜて販売し、利益を得ていたようですが、大手商社が入り、表示もごまかせなくなりました。これも自分の首を絞めていることになります。

落花生も中国産が多い。しかし味が全然違います。昨年中国へ農業の視察に行った時、しいたけの包装作業も見てきましたが、向うでは原木栽培

ではありません。以前は、原木を砕いてそれにホルマリンを混ぜたのだそうですが、それを吸収しているしいたけはいつまでおいても腐らない。私はそのしいたけを買ってきて、台所にそのまま1ヶ月置いたことがあります。私たちはそんなものを食べさせられているのです。今はどうなっているのでしょうか。

菌床栽培のしいたけは見た目はすごくきれいです。しいたけはどこで生産されてもしいたけ。それなら安い方がいい。そういう考え方が結局は自分の首を絞めることにつながっているのだ、と考えています。そのことが国内の農業をつぶし、生業（なりわい）としてきた産業をつぶすのです。町内にかつては数軒の豆腐屋がありました。今は1軒だけ残っています。その豆腐屋も国産の大豆は高くて使えない。輸入大豆でやって作ってきたが、卸してきた小さな店が止めてしまい、廃業寸前です。最近では、御用聞きに歩く豆腐屋も出てきましたが、生業ではなく、従業員を使い、営業所が何ヶ所かあります。スーパーで安い豆腐は買えるのですが、豆腐が口に入るまでのことを考えるだけでも、めぐりめぐって自分たちの暮らしの場を危うくしているのだということに、何故みんな気付かないのかな、と私は思います。

儲かればいい、会社は儲けるためにあるのだということ、JR西日本の場合もそうでした。競争に勝つためにはライバル会社より1分でも早く、という考えが優先し、乗客の安全性は二の次、三の次です。乗客はたまったものではありません。三菱自動車もそうでしたね。

最近では、生命保険業界の明治安田生命のことが話題になっています。事故が起きても、契約どおりに金を払わない。それを何十億円も支払わなかったということです。契約者は、これは支払うことに該当しないと言われれば、一般には引き下がるしかないわけです。

私は、隣の熊本県にある水俣市にもよく行きますが、水俣のチッソも同じことを長いことやってきました。今でも水俣病問題は解決されていません。補償問題があるので、国も会社をつぶせない

のです。

雪印乳業も、うそごまかしを知りながら、あるいは故意に続けてきて、最後にはつぶれてしまいました。雪印という会社は、もともとは協同組合組織でした。茨城県生まれの黒沢西蔵という人が創業者です。彼は足尾鉍毒事件で知られる田中正造の弟子で、後に北海道に渡って牛を飼いはじめた。最初は大手の乳業メーカーが相手をしてくれなかった。自前で工場を作り、農協として発足しました。雪印というのは真っ白で、うそをつかないシンボルです。その精神を忘れてしまって、あのようにバレなければなんでもやる、ということをして結局はつぶれてしまいました。このようなことがたべもの世界で起きている、というのがいちばん恐ろしいことだと思うのです。

反社会的なことを続けてやれば、会社はつぶされるということはおちこちで証明されているのですが、悲しいかな、未だにあちこちにそのような体質はしぶとく残っているというのが現状ではないでしょうか。

ここで、私と関わりのある全農の話を出しましょう。全農は農協の全国組織で、一つ一つの小さな農協では出来ないことでも、力を合わせれば、大手商社などに対抗出来るという考えから組織されたものです。ところが、自らをコントロール出来ず、偽装表示などで国からこれまで7回も業務改善命令が出されています。それに対する改善計画を提出する前に、今度はプロパンガスの販売で安全点検に不備があったとして、経済産業省から改善命令が出されました。農水大臣や事務次官の記者会見では、記者から反社会的な全農を何故解散させないのか、という質問まで出ています。他の業界なら、つぶれておかしくない、淘汰されてしまうケースです。財界などから農協解体論が出ていますが、その根拠のひとつにされています。指摘される全農も、あまただが、としか感じていないのではないかと思うくらいです。農協はうそをついてはいけなく、ごまかしてはいけなく。これは世界の協同組合が長い間かかって確立した大原則です。農協はうそごまかしをする組織ではない

はずなのですが、偽装表示の問題は全農だけではなく、単位農協の段階でも発生しています。市場原理主義、即ち儲けるためにはごまかしてもいい、安ければいい、という考えが農協にもじわじわと浸透してしまっている。そんな気がしています。

私は、次に私益、共益、公益ということを考えてみようと思います。

私益というのは文字通り、個人の利益です。誰でもいい暮らしをしたい、楽をしたいと考えて努力します。会社や農協などの組織の利益を図ろうとすることも、その組織にとっては私益の追求になります。しかし農協の場合は、私益だけでなく、組織者つまり弱い立場の組合員が、一人一人では出来ないことをまとまった力で実現しようとする組織です。だから、共同の利益、共益という言葉を使います。

公益とは、社会全体の益です。山形県庄内平野は公益の源流、故郷とも言われています。私は2年前に酒田市、鶴岡市、藤島町などを歩いてきました。その時に現地の人から聞かされたことは、公益の精神は「世のため、人のために」であり、「自分のことだけでなく、他人や社会にも思いを寄せること。思いやりが基本」だということです。モノを作り、欲しい人に分ける、販売する。今は分業の時代ですから、そのことは十分に社会的なことであり、適切な儲けを得るのは当然のことです。しかし、うそ、ごまかしを続けてまで儲けることは半社会的な行為であり、そうしたことを続けていけば、淘汰されるのも当然のことです。農協は、人が生きていくために不可欠な食料の生産を通して、組合員個人の私益、農協全体の共益、そして社会全体にも役に立つという公益、その三つを統一し、追求していく組織、市場原理主義とはなじまない組織だ、と私は考えています²⁾。

いつの時代でも、弱い立場のものが切り捨てられていきます。すべての人にかかる消費税も財務省では上げる準備をしています。専門家にいわせると、消費税を20%にしないと国の財政はまともにならない、と以前読んだことがあります。あらゆる分野で市場原理主義が幅を利かせていますが、

同時に国と地方公共団体の借金が合わせて1千兆円にもなっている、ということをお忘れではありません。1千兆円がどの程度のものなのか、私たちには想像も出来ない金額です。一般の企業ならとうとう倒産ですが、そのことを分かっていても誰にも止められない。それが今の日本の姿なのです。

3. いま、たべものは

遠くなってしまった食と農
私たちは普段、食堂やレストランなどで口にしているものは、どこで取れたのかを分らないまま食べています。

フードマイレージという言葉があります。マイレージという言葉は、飛行機をよく利用する方はお分かりだと思いますが、羽田・宮崎間だと何マイル、それをためると航空会社の特典があります。それと同じように、食料をどれだけ距離、重量も含めて運んできたのかを計算するでだとして、フードマイレージという言葉が使われるようになりました。数字が多いほど遠くから運んできた、ということになります。日本の場合、1年間で食べているものの合計が5千億トンキロ。とてつもない数字です。東京シカゴ間が1万キロだそうですから、その距離を5,300万トン運んで5千億トンキロです。これも見当がつかないくらいの数値です。日本人の食生活を維持するために、それくらい運んでいるということです。ちなみに人口が約2倍のアメリカは1,400億トンキロです。

日本人はエビが大好きな人種だそうですが、刺身やすしに出てくる甘エビはアラスカや北極グリーンランドからです。グリーンランドの水の下から採って運んでくるのです。オーストラリアにあるタスマニア島周辺からは伊勢エビを遠い距離を運んでくる。タイもエビの産地です。
わが国国民の食料支出は80兆円とされています。そのうち生鮮、つまり素材を買ってきて、あるいは自家で生産したものを台所で調理して食べるのはたったの2割しかありません。5割が加工品で、残り3割が給食レストランなど外食です。たった2割が家庭用ということです。8割はどこ

で生産されたか、加工処理されたのか分からない、ということですよ。

「デパート地下」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。デパート地下の食品売り場のことです。ここへ行けば、ご飯類もおかずも何でも揃います。お金さえあれば家で料理する必要がまったくない。まな板も包丁も要らないのです。コンビニも同じですね。ご飯類、麺類、パンなど何でも買えます。農協へ行く途中にあるコンビニの前には、出勤途中の車がずらりと止まっています。売る方は、見てくれがよければ売れるということで、食品に化粧をさせます。そして、素材価格の何倍にもなったものをみなさんは消費しているわけです。

たべものとエサとは違う

国民が支出する食料費80兆円のうち、農民、漁民、林業者など第一次産業に従事する人の取り分は10兆円くらいで、70兆円は流通加工業などに帰属しています。食費がかさむ、食料品の値段が高い、と文句を言われても、生産者の収入はわずかしかないので。第1次生産者である農民は赤字で逃げ出し、そこから先で仕事をしている人は、それで食べていける、不思議なことです。

米は一昨年大不作でした。そのとき農水省は、100万トンあった古米を全部放出しました。昔は何年も置いた米は、黄変米や「ココココ米」などと言って食べられなかったものですが、今は低温貯蔵米ですから、古くても食べられるのです。また上手に加工する技術もあって、何年前の米でも新米と同じように、テーブルに出る前に化けてしまうのだそうです。

3年前に無登録農薬を果物や野菜に使っていたことが社会問題になりました。最初に山形県産のラフランスで使っていたことが摘発され、あちこちで登録されていない農薬、使ってはいけない農薬を野菜や果物に使っていたことが次々に明らかになりました。そのことから国は慌て、大急ぎで農薬取締法を改正しました。農水省は、生産者から消費者へ軸足を移す、と言い出しました。トレイサビリティとかDNA鑑定とかの耳慣れない言葉が登場するようになりました。とにかく、たべも

のについてはきわめて当然であるべき、しかし忘れられていた安心・安全という言葉が出てくるようになり、少しは消費者の方が気をつけるようになりました。たべもの世界でこんなことがあっていいのか、と思いながら一連の動きをみていました。

先ほども触れましたが、たべものとエサとは違います。腹一杯になれば何でもいい、という人もいるでしょうが、そう考える人はそれで仕方がないと思います。私たちの身体は頭のとっぺんから足のつま先までたべものと水で成り立っています。病気になり、注射や薬などが体内に入ることがありますが、それは例外で、普通はたべものと水です。従って、身体に取り入れるたべものと水がおかしくなれば、変なモノを摂取すれば、身体がおかしくなるのは当たり前のことではないでしょうか。

例えば生産者は、豚でも鶏でも、コレラに罹った豚や鳥インフルエンザの鶏は出荷しませんですね。でもアメリカの牛肉は検査をきちんとしていないために、おかしなものも混じっているという話を聞きました。やはりたべものは命そのもの、これまでずっとそう考えて仕事をしてきました。

4. 地域循環型システムを考える

暮らしをみつめる—衣食住のいま

私が今着ている背広やワイシャツの素材がニュージーランド産なのか、オーストラリア産なのか、メキシコ産なのか、私には分かりません。国産でないということだけははっきりしています。

住宅も同様で、近くの工務店に頼めば、どんな家にするのか、間取りは、坪数は、単価は、工期は、などは相談するでしょうが、材料をどこのものにするか、などまでは相談しないのではないのでしょうか。食料は前に見た通りです。衣も住も似たり寄ったりです。

私たちにもっとも身近な衣食住の素材、原料がどこの産なのか分からない。そのことを気にも止めない。そうってしまったのは、たかだかここ30~50年の話ではないのでしょうか。たまには、素

材、原料がどこのものなのか、手に入るまでにどのような工程があるのか、そんなことも考えてもいいと思うのです。

私の家は戦後すぐに我が家の山の木を伐り出して、前の畑で製材し、乾燥させ、家が出来るまでに2年くらいはかかりました。60年近く経ちますが、まだまだちゃんとしています。こうしたのんびりした建て方は今ではなかなか出来ませんが、国産材が潜在量としては有り余っている現在、そんなことを見直してみてもいいのではないのでしょうか。

農を活かしたまちづくり

農を活かしたまちづくりについて考えてみます。ここ都農町にも楽しい仕掛けがいろいろあるようです。茨城も40年くらい前に田園都市づくり、田園都市運動というのがはじまりました。私の町から出た岩上二郎という県知事が起こした仕事ですが、昭和30年台、40年台の農村は貧しかった。また古い因習、じきたりが残っていました。

今でこそ、我が国のむらづくり運動の先駆けと言われていますが、その当時、ひたすらカネ取りに走っていた茨城の農村、農民の反応は冷たかったようです。茨城の田園都市づくりは、農民に人並みの、人間らしい生活を保障する最低限の環境条件を整備することでした。住宅、屋敷、曲がった道路の整備、こさ払い、田園都市センターの建設、共同墓地、共同給水など、生産・生活の両面にわたる総合的な整備を住民が主体となって行いました。

田園都市という発想は、百数十年前のイギリスで、都市と農村の矛盾が激化するなかでハワードという人が提唱したものです。農業生産と農家の生活(暮らし)を統一して考える、住民自らが智恵とカネを出し合い、それを行政が支援する。この二つが茨城での田園都市づくりの理念でした⁹⁾。

そして今、全国の農村・農業・農民はカネ万能主義に毒され、人々のこころはズタズタに切り裂かれてしまっています。

こちらの町の町勢要覧を拝見していて、そのようなことを思い出しました。田園都市に交響とい

う言葉が入っていますからハーモニーですね。いい響きだなと思いながら見せていただきました。別の表現で言えば、農を活かした町づくりになるのだらうと思います。

東京都日野市は東京の郊外にあり、農地はほとんど残っていませんが、「農業基本条例」を作っています。熊本県水俣市では「元気の出る村づくり条例」、埼玉県宮代町では「農のあるまちづくり基本計画」を作って、いろいろなことをやっています。山形県藤島町は2002年9月に「人と環境にやさしいまち宣言」を議会で採択し、その後、「人と環境にやさしいまちづくり条例」を制定しました⁹⁾。

農をきちんとまちづくりの基本にすえているということは、農に関わる、関わらざるに関係なく、そこで生活している人が、生き生きとして、豊かな気持ちで生活できる、そういうことを町づくりの基本にしよう、それには農が基(もと)になるということです。農は農業を含む広い概念です。地域循環型農業とか身土不二とか言う言葉がありますが、学校給食にも無限の可能性があり、大事にして欲しいと思います。

例えば私のところは、東京から1時間で来られるところですが、休日の国道は東京などからの客で混みます。混むのが分かっている、何故お金をかけてやってくるのか、と私は思うのですが、都会に住んでいる人にとっては、山があり、川があり、畑や田んぼがある風景が憧れであり、やはり自然がいいということなのだと思います。帰りには農協の直売所で米や野菜を買っていきます。人間は本来自然の中で生きてきたもので、もっと言えば、人間も自然の一員であり、そのDNAが体内にあるのだらうと思いますね。だから都会からいなかへわざわざやって来るのだらうと思います。先に挙げた村や町ではその中で自然を残し、活かし、交流をきちんと位置づけ、やっているということです。

直売所のことですが、私のところでは管内に4カ所あり、昨年度は全体の売り上げが5億円を超しました。茨城県では年間の販売高が13億円とい

うのがいちばん大きい店です。全国規模では20億円を超している直売所があります。直売所といっても、最近は農産物を売るだけでなく、農家レストランがあり、温泉があり、ハム・ソーセージ作りをしたり、栗拾いをしたり、芋掘りをやったり、そういう体験型の家族で楽しく遊べる施設が増えています。ビールを造っているところもあります。全国農協中央会はこのような規模の店をファーマーズマーケットと呼び、直売所と区別しています。安ければいいという店舗とは違って、農村、いなかを売る、というような形が流行っています。

5. ささやかな体験から

直売所が流行るわけ

私は、長い間農協で働いたり、町長として行政で仕事をしたり、大学で教えたり、家で農業をやったり、いろいろなことをやっていますが、地元の農協で直売所を20数年前にスタートさせました。また有機農業に取り組みましたが、当時の組合長から、江戸時代の農業に戻れといふのかなどと言われ、農協内ではその後は有機農業という言葉は使わないようにしたのですが、しかし時代は変わり、今は直売所がブームです。

直売所はどこにでも作れます。生産者と消費者、若い人と年寄りなど新しい交流の場にもなっています。これまでいろいろなところで直売所設立のお手伝いをさせていただきましたし、自分のところでも率先して立ち上げています。新しい直売所を作ると、規模にもよりますが、ある程度の大きさになれば、販売高は簡単に1億円はいきます。新しいところでは1日40万円くらい売っています。新しい作物を導入して1億円の産地にするのは大変なことです。直売所を作って、少量多品目で、切れ目なく農産物を出しておけば、それくらいは売り上げてしまうのです。

何故なのか。外国のものはイヤ、安心なものを、と主婦は思うのからではないでしょうか。自分の子ども、家族にはちゃんとしたものを食べさせたいという意識、本能があるのではないかと思います。誰が作ったのか、顔が見える、鮮度もいい、

値段が手頃である、というのが直売所の基本ですが、それで来るわけです。誰が作ったのかがラベルに表示してあります。残った野菜は次の日の開店前には下げてしまいますから、直売所の朝はその日のものでスタートします。中国の野菜は、私は昨年11月に上海近郊へ視察に行ったのですが、日本向けの場合、ブロッコリーやキャベツなどどんなに早くても収穫から店に並ぶまで1週間かかるのだそうです。

国産と輸入物と比べてみれば、夕方か朝取りのもの1週間前に収穫したものが並んでいけば、輸入物は絶対になかない。この地域の〇〇さんが作ったということがはっきり分かるわけです。人口1万人で直売所の需要は1億円ある、というのが全中のレポートにありました。観光地だとさらに売り上げは期待出来る、ということです。

ゴルフの客などは米や野菜をお土産にたくさん買っていきますから、土曜、日曜日は信じられないほど売れます。茨城県内で農協が運営している直売所は60店舗ありますが、1店舗平均で売り上げは1億円を超えています。私たちが戸板1枚で青空市を始めた頃は1日1万か2万円の話でした。現在の盛況が信じられないくらいです。農産物の品揃えから考えると、客はあれも欲しい、これも欲しいというのが心理ですから、ある程度は規模があって、生産者の出荷組織は100人の会員がいないと駄目ですね。

直売所にはスーパーでは買えない、珍しいその地域のものがあるのです。春の山菜、秋のきのこなど。つけもの石、オタマジャクシを売っていた店も知っています。直売所では、機転さえきけば何でも売れるんですね。人と同じものを作らないとさらにいい。

いつの時代でもそうかとは思いますが、食の安全性ということが分かる人には分かる、分からない人は分からない。駄目な人は仕方がないと思っています。どこで買うのか、どれを選ぶのかは自分で決めればいい社会です。作る方も、直売所のように、地場で売なのか、東京へ出荷するのか、契約栽培にするのか、自分で選べます。昔の米作

りのように政府売り一本ではありませんから。生産者も消費者を選択することが出来ます。あとは自己責任です。どの方法を選ぶのかは自分で決めるしかありません。

みそ、醤油、砂糖、みりんなど調味料なども含めて瓜連直売所では純正、純良なものを用意しています。高いのですが、それを目当てに来る人もいて、売れています。基礎調味料は、年にどれほど使うかを考えてみれば安いものです。特売品を買うのか、純良なものを選ぶのか、どちらを選ぶかはそれぞれの自由です。

瓜連町の事例

机の上に置いたこれは「瓜の華」という名の日本酒です。農協の課長をしていたとき、農協で酒も扱っていましたが、自分で飲む酒は自分たちで作りたいと考え、隣町にある造り酒屋へ頼み、町内で作った米（現在は若水という酒米）で作った自分の酒ということで仕込んでもらいました。どこかへ飲みに行くときには、私は必ずこの酒を持っていきます。何人いても1升瓶1本しか持っていきません。うまいと思ったら、買ってくれ、と言うのです。プライベートブランドの酒は、今では珍しくありませんが、20数年前には近くにはそういうのはなく、話題になりました。

焼酎も持ってきました。今年5月に誕生した新しいもので、「へのかっぱ」という名前です。九州はいも焼酎の産地ですが、この「へのかっぱ」は干し芋で作った全国で唯一の焼酎です。（その後、鳥取県倉吉市に干しいも焼酎があるのが判明したので、全国唯一ではない）。水戸市の酒造メーカーに製造を頼んでいます。デザイナーと焼酎を飲みながら、名前を何にしようかを考えて付けた名前です。

この漬物は「瓜連の味」という名前の漬物です。純良な調味料を使っています。漬物は私たちの生産量では、安売りをしても大手のメーカーには勝てません。キュウリやナス、大根などの素材も全部瓜連町の母ちゃんが育てたもので、それを母ちゃんたちに作ってもらっています。いまは、まんじゅうやもち、惣菜、弁当も作っています。加

工所は母ちゃんが組合を作って独自に運営してきたのですが、20年も経つと、結構くたびれてきて、今年からこの加工施設を農協直営にしました。作ったものは直売所などで販売しています。こんな酒を飲みたい、こんなものを食べてみたい、と思えば、まずやってみる事です。多分、都農のワインもそういうことからスタートしたのではないのでしょうか。女性起業の時代などと言われていますが、やる気があって、それを実行に移す人がいれば、大抵のことは出来ると思っています。

私は1990年から4年間町長をやりましたが、まちづくりの指針となる総合計画を住民参加によって作り上げました。住民主導とすべく、福祉厚生、生活環境などの6つの部会で88回もの会議を開いたこととなります。また、小学校の校舎改築の時に、体育館と合わせて木造校舎を建てました。当時文部省は、21世紀を担う子供たちにうるおいとぬくもりのある教育環境づくりを、そのために学校を木造で建てることを推奨していました。

体育館は島根県の出雲ドームと同じように、集成材を使いました。この体育館にタイの舞踊団を呼んだり、群馬交響楽団を呼んだり、ダークダックスを呼んだりしました。当時、町には大きな文化会館のようなものはなかったの、この体育館が町の文化ホールでした。1千人以上は収容出来ますから。

瓜連というのは、語源がアイヌ語だと言われています。弥生人が我が国に進入する前は広く縄文人が住んでいました。アイヌも縄文人の流れだろうと考えています。地名のルーツを探ると、縄文語にたどりつくことが多い、とは研究者の調査である程度分かるようになっていきます。それはともかく、瓜連は瓜があたり一面に転がっているということではないのですが、それをまちおこしに使えないだろうかと考え、昔のまくわりをたくさん作ろう、と岐阜県真正町（合併前は真桑村）から種を取り寄せて、みんなに作ってもらいました。遊び心です。

ここには日向一宮都農神社があります。私の町には静神社という常陸二の宮があります。一千百

年くらい前に静で古代の織物である倭文織（しづおり）がというものが織られていました。どのような織物なのか、現物が残っていないので分からないのですが、『常陸国風土記』などの文献にはたくさん出てきます。これは面白いと考え、これを復活させました。繊維はコウゾです。県の補助を受けて機を10台買い、2台は木造校舎に置き、小学生が慣れない手つきでコウゾの織物を織っています。田んぼで米を作って餅もついています。

衣食住を小学校できちんとやろう、と瓜連へ転動になった小・中学校の先生に、瓜連町のことをきちんと勉強してください、そしてふるさと教育をしながら、瓜連町の子どもを育てて下さい、と申ししてきました。

それと、ゴミの有料化を導入しました。ゴミ袋を有料にし、減量化に取り組みました。議会では反対されたのですが、町のお母さん方、消費者の方たち、区長などが働いてくれ、実現にこぎつきました。議会では、税金の二重取りだと言われたのですが、今ではもう当たり前のことになりました。

学校給食に地場産の野菜を使うこと。これは私が農協職員だった時に始めました。にんじん、じゃがいもなどの根菜類から始めました。町長の時に地元の米も導入したい、と考えたのですが、そうすると、米に出ている国からの補助金が打ち切られる（確か400万円くらいの金額）、と議会から反対され、実現しませんでした。今では地場産の米を地元の子どもたちに、というのは当たり前になりました。その時には、PTAからも反対されてびっくりしました。給食の食事はエサではない、安ければそれでいいというものではない、と考えたのですが、駄目でした。

東海村での経験

東海村は瓜連町のすぐ近くにあります。総合計画づくりを住民参加でやりたい、という話が出て、手伝うことになりました。まず、120人の住民代表、80人の職員を策定委員に選びました。アドバイザーとして、私の知っている茨城大学の先生など約20人をそれぞれ経済環境、教育、建設などの

部門別にお願ひしました。地区計画も作りました。自転車で村中を歩きながら、2年かけて「人・自然・文化が響き合うまち」を目指した「どうかい21世紀プラン」を作り上げました。大分県湯布院町、福島県三春町などの総合計画を参考材料としました。総合計画策定に携わった人たちのパワー、エネルギーが残り、今花を開かせています。

前に触れたように、東海村は原子力の村ですから、原子力関係の企業城下町です。村の収入の大体70%は原子力関係企業からの税金です。そして、かなりの村民は原子力関連企業のどこかに関係しています。ビジネスホテル、商店なども関わっています。総合計画の策定作業中にあのJCO事故が起きました。それまで、東海村には「原子力安全神話」というのがありました。原子力は人間が厳格にコントロールしているので、事故は起きない、という話でした。

そのような中で事故が起きました。そこで、「まちづくりは、住民の安心、安全を確保することが最優先である。20世紀を貫いてきた経済優先の立場から効率化、画一化、集中化、右方上りなどを追求する路線を排して、人・自然・文化を重視し、安全、安心、快適、個性、分散などに価値基準を置く方向に転換する」という理念を打ち立てました。

環境自治体会議のことですが、第1回は地球サミットがブラジルのリオデジャネイロで開かれた1992年5月に、ワインで有名な北海道池田町の石井明町長、基地の町神縄県読谷村の山内徳信村長、私の3人が呼びかけ人となって開きました。木造校舎は環境にやさしい建物だという評価を受けてのことでした。

時を重ねて、13回目の今年は東海村で開かれました。来年は鹿児島県指宿市で開かれます。東海村には全国から800~1,000人の参加者がありました。千人集まっても、分科会では首長、議員、職員、環境ボランティアなどがすべて同じフロアで議論が出来るのがこの会議の特徴です。最初の頃はかなりハイレベルの議論が多かったのですが、この頃は具体的な報告が多く、参加者は納得して

帰っていきます。

東海村では現在農を活かしたまちづくりをどう進めるかについて、行政と農協とで話し合いを進めています。農地があまっている、農業をやる人が少なくなっている、安全・安心な農産物を食べたい人が村内にいる。ではどうしようか、ということがスタートラインです。

遊休農地をまとめる、それを特定の集団に委託する、有機農業、低農薬・低化学肥料による特別栽培農産物の作付け、堆肥づくり、学校給食への供給、直売所での販売、定年帰農者の活用、農家レストラン、加工施設の建設、学童農園、高齢者の生きがいづくりなどいろいろなことが考えられます。東海村には直売所があるのですが、規模が小さすぎるので、計画している拠点は直売所を超えた複合施設になるはず。農を活かしたまちづくりの具体化を村と農協と一緒にやろう、ということ。です。

6. ではどうする

どんなまちにしたいのか

最初にやることは、誰かと自分の町をどんな町にしたいのかを考える、決める、こんなことしかありません。そして動くことです。まちづくりは全国一律ではありません。教科書もありません。誇りと愛着を持てるまち、が目標になるでしょうか。

カネだけが目当てでは決してありません。みんなでということ、いろいろな自給度の高いまち、こころの豊かさも指標になります。風格のある景観、風景。いろいろな事例がありますが、先に挙げた湯布院町、長野県小布施町、徳島県の脇町や滋賀県の近江八幡市、長浜市、鹿児島県知覧町などはいい町並みです。

近江八幡などのように、昔の町並みをそのまま活かす方法もあるし、それがないところでは作ればいいのです。小布施などは少しずつエリアを広げています。三春町は時間をかけながら昔の町並みを復元しています。

風格のある景観と言いましたが、町にあるもの

を活かすとすれば、都農には日向一宮があります。また都農は大正9年に町制を施行したそうで、当時はこの周辺を中心都市だったと思います。そんなことからこれからの手だてがあるのではないのでしょうか。

交流ということも大事です。私は全国各地を歩いています、なるだけ一人でなく、母ちゃんたちを連れて行きました。補助金なし、みんな自費で。湯布院へ行った時は「玉の湯」の溝口薫平さんから「風は何かを運んできてくれる」と言われました。瓜連で漬物をつけた母ちゃんたちは湯布院のあと中国へ行きました。漬物で名が知られたところは随分歩きました。物見遊山の旅でもいいのですが、大事なことは、よその目で見るということだと思っています。自分を振り返ることも出来ます。見学、視察することによって、そっくり真似を出来ることもあります。真似が出来ないとすれば、どうすればいいのか、みなさんで考えるしかないのです。どっぷりつかっていると、自分の居所が見えなくなりますし、見ようとしなくなります。まさに「人のふり見て我がふり直せ」です。

どこから手をつけるか

次に、景観でもモノでもいいのですが、どこから手をつけるかということです。水俣市役所職員の吉本哲郎さんは、「ないものねだりよりあるもの探し」と言っています⁶⁾。東海村の計画づくりの時、地区計画を作るためには、まず自分の住んでいる地域のことを知らなければなりません。だから自転車で回ったのです。生活の基礎のところから見つめようということです。すると年輩の人は、子どもの頃はこのあたりはこうだったと思い出し、結婚してよそから東海村に来た若い人は、隣近所にこういうすばらしいところがあったんだ、と初めてのところを発見します。ここはゴミがいっぱい棄てられているので何とかしなくてはとか、小さい子どもには危険だからとか、自動車では分からないことが自転車で回るとよく分かるのです。そして次の手順として地域の資源マップを作ります。人の住んでいるところに価値のないところは

ない、と言います”。

資源マップを作ったら、地域で何を活かすのか、何を残すのか、足りないのは何を補えばいいのか、などを参加者で考えます。この場合、まとめる人がいないと先へ進みません。プランナーが必要です。東海村では地元の策定委員、事務局である役場職員がまとめました。アドバイザーである大学の先生方も私も、あとで修正はしましたが、最初の文章は書きませんでした。その人たちが書くということが大事なことです。東海村での環境自治体会議でも、計画の策定に参加した人たちが生き生きと活動していて、よかったなあと思いながらその活躍ぶりを見ていました。

もう一つは農業をどうするかです。この町でも農業が基幹産業だろうと思いますので、農業をよみがえらせられるのか。これは農協、行政そして消費者であるみなさん方がそれぞれ役割を分担して、自分のところで何をどう活かすのか、伸ばしていくのか。ここのワインのように新しい物を作り上げていくことです。地域循環型農業を考えると、学校給食と直売所がその核になるだろうと私は考えています。

私のところは、名物、特産品は何もなかったのです。漬物も酒も。でも米はある、野菜はある。今ではまんじゅうも餅も作っていますが、春のよもぎは河原の土手へ行けば、いくらでも取れます。小豆も自分たちで作ったのを持ち寄ってあんこを作る。小麦粉も自前。そうして新しい物を作ってあげたいのです。これが「モノを活かす」ということです。モノを活かすには人が動かなくてはなりません。

人口9千人の町で1年に何度か、千人規模のイベントをやりました。2千本の八重桜が咲く公園のステージで千人を集めるのは難しいことはありません。町長が命令をかけてやるのではなく、実行委員会を作って1人が10人20人と声をかけて輪を広げて行って、千人を集める。これが「人が動く」ということです。人が動くためにはみんなの心がつながっていなければならない。一つのことをやるためにみんなのところがつながっている、

ということではないでしょうか。これが「ところをつなぐ」です。

村上ファンドや楽天、ホリエモンのように、カネで何かを動かすというのは、私たちの世界とは違うな、と思います。

この町で、この地域で何をやるのか。それは皆さんが決めることです。そのためには1万2千の人たちがところをつないでいくことです。何かを始めれば、動き出せば、確実に1年後2年後にはこの町は変わっています。そのことを期待して私のお話を終わります。

(本稿は、2005年11月5日に宮崎県都農町で行った講演記録に加筆したものである)

(注)

- 1) 「新しき村」の80年の歴史を総括したものとしては、奥脇賢三『検証「新しき村」』、1998、農文協、が参考になる。
- 2) 佐藤裕輔『「下流社会」はまだ甘い』『週刊金曜日』2005年12月2日号。
- 3) 「公益」については、小松隆二『公益の時代』、2002、論創社、同『公益とまちづくり文化』、2003、慶應義塾大学出版会、を参照されたい。
- 4) 茨城県の田園都市建設については、田園都市十年史編纂委員会『田園都市十年史』、1975、茨城県田園都市協会、先崎千尋「地方自治体の経済政策」(常盤政治編『経済政策』、1994、有斐閣)、を参照されたい。
- 5) 先崎千尋「農あるまちづくり農業基本条例を作ろう」、アースデイ21編『地球と生きる133の方法』、2002、家の光協会。
- 6) 吉本哲郎『わたしの地元学』、1995、NECクリエイティブ。
- 7) まちづくりの手法については、田村明『まちづくりの実践』、1999、岩波書店、が参考になる。